

キリスト道講演会

本当の自由、確かな希望そして愛

2003年10月18日 (東京 山手教会)

奥田 昌道

フィンランドからの宣教団 小池辰雄先生との出会い 善き方は天の父のみ キリストの復活
ほど自然なことではない イスラエル民族の原体験 十誠は十言 無者キリスト 同じ太陽の光
キリストと一つになって歩む 無限無量なるキリストを世界に発信する 祈り

●フィンランドからの宣教団

こんにちは。皆さま、よくおいでくださいました。私が今日ここでお話しようとするのは、いわゆる私の人生観とかいうものも含まれていますけれども、その源はすべて主イエス・キリストから来ていると思っております。私の70年の生涯を省みながら、自分が今ここにこうして生かされているということが実に不思議なことであるという思いがしてなりません。

若い時は、すべて自分の努力で、自分が道を切り開くのだと思っていました。他人に依存するのではない。まず自律、独立、わが道を拓く^{ひら}ということ、私は本当に努力の塊^{かたまり}のような人間でした。才能が乏しいものですから、ひと倍の努力をしなければ道は開けないというところで、精いっぱい自分でやってきたつもりです。しかしながら、やって行きながら、大学生の頃、それから大学卒業後、研究者として大学の研究室に残りました頃から、そういう私のひたむきな生き方がますます強くなるけれども、それと反比例してというか、一方でそのように進むという力が内から出てくるけれども、それと同時に、

「お前はいったい何者なのだ。何のためにそういう努力をするのか、何に向かって進んでいるのか。お前は何をしようとするのか。お前にとって学問とは何なのか、研究とは何なのか。お前の人生、お前自身の命は何なのか？ 何のために生きるのか、何のために人生はあるのか、私はどこへ向かって行こうとしているのか？」

という囁き^{ささや}が絶えず私に降りかかってきまして、それに自分が答えられない。その頃、私はキリストの世界は何も知りません。素朴な信仰は持っていました。私は母親の影響で、清荒神^{きよこうじん}さんというのを一生懸命信じていた。そういう素朴な信仰で大学受験も成功し、司法試験も突破し、研究者として大学にたった一人残ることができた。しかし、そういうふうに分でやってきた道はもうその辺で限度でした。本当に人生の導き手として、人生の確かな道を示してくださる方が私は欲しくてしょうがなかった。けれども、それはついに、それまでの自分の知識とか読書からは得られなかった。そして、だんだん暗闇の中に落ち込んで行った。

研究者として2年目の夏に、その時に初めてイエス・キリストのことを教えてくれた友人がいた。とりあえず友人と言っておきましょう。彼は大学院生として研究室に残っていましたが、私は助手という身分で残りましたので、あまり日頃、接触はなかった。私が非常に悩んでいた時に、彼が私に切々とキリストのことを説いてくれた。私はとても心打たれまして、

「彼をこんな光輝^{こうき}かshめてその背後にいるキリストというのは凄いお方に違いない」

と思ひまして、それで彼が導かれていた教会へ行きました。その教会はフィンランドからの宣

教師が開拓伝道をされていて、夏の間は本国に帰っておられる。その宣教師の身代わりとして、小さな集まりですが、その友人が指導していました。そこに行きまして、ずっとその所で導かれて一生懸命やっていた。やがて、アメリカからオズボーンという伝道者がやってきた。これはまた凄かったですよ。神癒伝道です。

「あの昔の時代のキリストは今も変わりましたまわらない。嘘だと思つたら、皆さんここでもしかと確かめてください」

と言う。あの京都四条烏丸^{からすま}の大丸の横の空き地に何百人という人が集まってくる。そこでキリストの福音を語る。しかも、

「キリストは今も生きておられる。もし皆さんの中で病氣を持って苦しんでいる人がおられたら、出てきてください。私が祈りますから」

と言つて、壇上で見も知らない人のために手を按いて祈る。その祈りがもう涙を流して、切々と祈っているんです。私たちは占領されていた民族です。戦勝国の若い宣教師が――30歳代ですよ――我々のために本当に誠心誠意祈っている姿に凄くうたれました。それから何よりも、その宣教師の信仰の姿にうたれました。信じて疑わないですもの。

「キリストは昔も今も変わりましたまわらない。嘘だと思つたら、私を通してなされる神の御業^{みわざ}を見よ」

と、まるでモーセのような言い方をするわけです。私は始めは疑っていた。だんだん疑えなくなつた。そういう体験がありました。私自身もちよつと内臓に病をかかえていたので、絶えず大学の診療所に通つていた。私はさすがに壇の上までは行かなかつた。一週間ほどたつと、

「もうこの場にキリストの霊が満ちあふれている。だから、皆さん、私がいちいち手を按いて祈らなくてもいい。私が祈る時に、皆さんも自分の患部に手を按いて祈りなさい。そしたら癒されますから」

と。私はそのとおりにしたら、治つたように思つた。それで一切それからもう診療所に行かなかつた。まるでそこで生まれ変わったような体験がありました。これは本当に入口の素朴な、本当に私がまだよちよち歩きの時に、そういうアメリカから来た凄い宣教師にぶつかつて、そんな情景を目で見たものですから――「見ないで信ずる者は幸い」なんでしょうけれども――私はあのトマスのように、本当に見て信じたんです。

ところが、大学に行きまして、そういうことを研究者の方々に私が話すと、

「お前はだまされている。あんなのはサクラだよ。そんなことがあるものか」

と、相手にしてくれない。けれども、私にとつてそれは非常に新鮮でありまして、やはりそのくらいのキリストでないと、私は信ずるに価しなないと思つていた。そのくらいのことをしてくださるキリストでなければ、私は信じたくないと思つたものですから、それ以来、本当に聖書に熱中しました。そして、いろんな悩みはかかえたまま、とにかくそれで研究生活に戻れた。それまでは、研究していてもうわのそらで、本は読んでも読めない。字面を追っているけれども、中身の理解には入れない。ところが、それ以来、本当に喜々として読むことができました。

「そんなことをする営みがいったい何の意味があるのだろうか？」
そういうことは思わなくなつた。

「とにかくやろう、遅れをとり戻そう」

と。そういうことでやれたのが私の24歳の頃でした。それ以来、私はキリストの道に導かれた

けれども、今度はキリストの道に入ってからが大変でした。いろんな教派がある。いろんな本がある。読むと、読むのが恐かった。

「これをしてはいけません、あれをしてはいけません。これはだめです、あれはだめです。あなたはクリスチャンです。クリスチャンは世の人々の模範でなければなりません。みんなはあなたを注目しています。あなたが変なことをすると、キリストの名がすたれます。それはあなたの責任です」

と。なんだかだんだん、律法の包囲網に閉じ込められたようで、人の前でうかつにもものも言えない。閉じこもりしなくなる。私はキリストに救われて非常に喜んだ時は幼子おきなごの如くでした。けれどもだんだん、自分で自分というものを見つめ直しますと、その自分が恐くなってきた。そしてまた落ち込んだ。

●小池辰雄先生との出会い

そういう時に、小池辰雄先生に出会ったわけです。1959年の秋のことでした。先生は京都大学でお話してくださった。先生のお話は実に自由でのびのびしている。「これだ!」と思っただ。それで、私は本当に飛びついた。先生も喜んでくださいました。ところが今度は、宣教師さんから叱られました。

「無教会の先生と交わりをするとは何事だ! 彼らは聖餐せいさんもしない、洗礼もやらない。

大体、ノンチャーチ(無教会)とは何事だ。そんな先生との繋がりは即刻やめなさい」

「いいえ、そうじゃない。あの先生は本ものだ。私は目が開かれた。だから、どうぞ、そういうことは仰らないで、許していただきたい」

と言ったけれども、その教団は許してくれなかった。もしそれを許すと、その教団が成り立たなくなるといふ、きつと内部規律があるんでしよう。それで、私たちは残念ながら、その宣教師さんとサヨナラをした。そして、独立の道、道なき道を歩むという歩みを私は、私を導いてくれた若き兄弟と一緒に「京都独立福音集会」という名前を付けてやり出したわけです。

彼は伝道者の道を選びました。私は学校に残りました。そこで聖書研究会を作りました。その兄弟に来てもらって、「楽友会館」という大学会館で週に二日くらい夜に聖書の研究会をやった。学生たちに呼びかけて一緒に聖書を勉強しよう。その兄弟は、

「自分は大学から出た。奥田君は大学に残ってくれた。自分ができなかったこと、つまり若い魂に語りかけることをやりたい。君は大学に残ったんだから、世話をしてほしい」

と。私は人集めをする。ポスターを貼ったり、ビラを配ったり。そして彼がお話をしてくれる。そういう二人三脚の時代がありました。それから、ドイツへ留学した。ドイツでいろんな向この教会の姿を見ました。それで少し視野を広くしていただいた。そしてちょうど東京オリンピック(1964年)の頃に帰って参りました。それからまたその次の段階に入りますけれども。

概略そういった歩みでした。私にとっては、小池先生は道を開いてくれた恩師である。しかも私が狭い中に閉じこもろうとしていたのを開いて、解き放ってくれた。私はやはりキリストしもべの僕でありながら、学問の道を歩んでいる。学問というのは理性に頼って、とことん疑ってかかる世界です。信仰という世界、聖書のことを信じていくという世界は、「信じる」という。疑うな、信じる」という世界と、「疑いつつ道を切り開け」という学問の世界は、どこでどう繋

がるのかわからない。それでまた悩んだ。特にあの頃はマルクス思想の盛んな時代です。マルクスは、

「キリスト教や宗教は阿片^{あへん}である。あれは民衆を欺く宗教だ。目覚めろ」と言うわけですよ。

「法律なんてとんでもない。あれは支配者の道具だ。法律学に浮身をやつすのは人民の敵だ」

と言わんばかりのマルクス学徒が身の周りにいっぱいいるわけです。その中で自分はどう歩めばいいのかと悩んでいた時に、小池先生はこういうことを言ってくれました。

「奥田君、樹木の姿を見てごらん。人はみな樹木の上の姿を見ている。ああ立派に繁っているな、あの葉っぱはすごいな、日照りでも枯れないなと、上を見ている。しかし、その樹木には隠れた根っこというものがある。樹木が上に上にと伸びていくときには、下へ下へと同じだけの根が下へ伸びている。そして、横に樹木が枝を張っているときにはそれと同じだけの根が横に張っている。

その根っここの世界、見えない世界、これが宗教の世界、神さまとの繋がりの世界である。見える世界は私たちの理性の世界、文化の世界だ。政治や経済その他、芸術や学問であり、そういった文化の世界。社会において人の営みは大事だけれども、それを支えているのが見えない根っここの世界だ。根っここの世界のない文化はいずれ滅びる。

残念ながら日本人はその根っこを深く掘り下げるといことを、いつのまにか忘れてしまった。上の世界ばかり追っかけるようになった。しかし、それではだめなんだ。根っここの世界を求めよ。方向は違う。方向は違うから、それを一つにしようというのは無理だ。しかし、方向が違うということとは両立するということだ。だから、本当に根っここの世界を深めていけば、学問の世界でもまた新しい智慧、新しいものがきつと開けてくる。神学やキリスト教であるいはドイツ文学ならばキリスト教と調和するか、そんなことではない。法律学だつてきつとそうだよ」

と、そう言うてくださったので、私はそれを信じて、それから誰が何と言おうと、やろうと思った。法学の中でも非常に根っこに関わるような、歴史的にはローマ法からずっと辿って現代法に至る、そういう系譜を調べていくという研究に没頭しました。

そういう研究でしたら、5年や10年はゆうにかかるので誰もしません。現在のことをやっていますと、これは早くテーマに飛びついて、早く発表した者が勝ちなんです。ノーベル賞の世界がそうでしょ。誰が早いか。ところが、根源の世界を追究するのは、10年、20年単位、あるいは50年単位です。誰もやろうとしない。私の学問の方の恩師はまた非常に素晴らしい方で、

「奥田君、5年や10年ですぐ答えが出るようなテーマはやめなさい。一生かかれるくらいの骨のある、手応えのあるテーマに取っ組むんだよ。それが京都大学の伝統だ」

「はい、そうですか。ありがとうございます」

と。不器用な自分ですから、そういうところを取っ組んできました。私が今日あるということは、そういったキリストの導き、そしてキリストが私の前に差し出してくださった方々の導きの中で育ってきた。しかも、小池先生に私がどういう点で打たれたかといいますと、先生は、

「キリストとはどういう方か。あの方は偉人でも何でもありません。化け物ではない。当たり前の神の子ではない。神さまの前に自分を何ものとしなかった方だ。神さまが一

切であつて、その前に自分が本当にからつぽだった。人が本当に神さまに自分を献げ
きることはできない。それが罪というものだ。「ああいう罪を犯した、こういう罪を
犯した、こんな汚い思いが相変わらず沸き上がってくる」というのは枝葉だ。

人間の本性そのものが神さまに逆らっている、この自分の存在そのものが実は罪な
んだ。そこから逃れることはできない。けれども、イエスを見てごらん。あの方は不
思議な方だ。始めから神さまの懷に抱かれていたような方なんだ。そして、物心つい
たときから、あの方は祈っていたお方だ」

と。そして、「荒野の試み」の前にヨルダン川でのバプテスマがあります。洗礼のヨハネが、

「あなたは神の子で、私こそあなたからバプテスマを受けなければならぬのに、
あなたは私からバプテスマを受けたいと仰るんですか」

「いや、今は私の言うとおりにさせてほしい」

と言つて、ヨルダン川に身を浸された。ヨルダン川というのは、この地球では一番低い所を流
れている川だそうです。その一番低い川にイエスは身をゆだねた。小池先生はこう仰った。

「悔い改めを必要としないイエス・キリストが、悔い改めようとしても本当の悔い改
めができない私たちの弱さ、罪深さを背負つて、ヨルダンの川底に身を沈めたんだよ」

と。そんなことは私は初めて聞きました。そのくらいにキリストは己を何者ともしておられな
い。そして、その方が水から上がってきた時に、天が開けて聖霊が鳩のごとくだつてきた。

「これぞ、わが心にかなう者、私はお前を喜ぶ」

という御声^{みこゑ}がやつてきた。初めてですね、人にそういう御声が臨んだのは。それからその方は
御霊^{みたま}に導かれてユダの荒野に行かれた。そこで四十日四十夜、断食された。私は「四十日四十
夜」と聞いただけで卒倒しそうになる。私は断食というのはまだしたことがない、申し訳ない
ことに。キリストは四十日四十夜、断食された。初めて飢えを感じられた。その時にサタンが
やつてきて、

「お前は神の子だろ。神の子ならば何でもできるはずだ。その石ころをパンに変
えてみる」

と言つて誘惑した。「石ころ」というのは軽石のようなものですから、パンと似ている。しかし、
全くパンとは違う。それを本当のパンにしてみると。ところが、キリストは、

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」

と言つて、撃退されました。今度は、福音書によりますと、ルカ伝では、

「山の頂きに連れて行つて、世の栄華を見せた」

とある。マルコ伝、マタイ伝では、先に塔の高い所に連れて行つて、「そこから飛び下りてみる^お
と。順序は違いますが、とにかく三つです。マルコ伝などによりますと、

「塔の頂きから飛び下りてみる。神の子だろ。『天使が支える』とちゃんと詩篇の
言葉がある。神の言葉が保証しているから、お前は飛び下りてみる」

とサタンが言う。キリストは、

「神を試むべからず」

と撃退された。三つ目が、山の頂きからこの世の栄華を見せて、

「私の前に跪ひざまずいてごらん。それを全部お前のものにしてあげるよ」

と。キリストは、

「ただ神にのみ従え」

ということに撃退された。この三つのキリストの勝利。小池先生は、

「これはキリストは自分の霊力でやっていない。全く聖霊の勝利である。キリストは聖霊に委ねきつておられる。その聖霊に委ねきつた、聖霊とサタンとの一騎討ちである。それで聖霊が勝たれた。キリストは自分の霊力で勝ったのではない」

と。そこでサタンはしばしキリストから離れた。天使たちが来てキリストに仕えた。それから今度は、ガリラヤの方にキリストは帰って来られて、伝道を始められるわけです。

「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」

天国は近づいたと、そういうキリストの中に天国が充滿している。それはそうでしょう。四十日四十夜、それだけのことをやって、本当に神の霊に満たされて、そして人々の前に立たれた。そのキリストがああ「山上の垂訓」の第一声、

「恵さいわい福なるかな、霊の貧しき者」

と。霊が貧しい。神さまの前からっぽだと。

「善き方は神のみ、父のみ。私は何ものでもない」

と。これがキリストの根本自覚である、ということを小池先生は仰った。私はそれまで、「心の貧しい人は幸いだ」ということを、

「何で、さもしい根性の人間が幸いなのだろうか？」

と、その程度のことしか知らなかった。そうでしょ、心の貧しい人間、「あいつは貧しい心の人間だ、さもしい人間だ」と。ところが、小池先生はそれを、

「霊の貧しい、霊が神の前に何ものともしてない。神一切で、自分からはからっぽ、そこに神の国という神さまご自身が満ち満ちた」

と。だから、キリストは、

「私を見た者は父を見た」

と言われた。キリスト自身が天国体です。だから、キリストが手を按おかれると、たちどろに病める人が癒されました。死人が甦よみがえりました。それは当然のことでしょ。神さまは、今まで預言者たちを通していろいろなことをなさった。人を救いたくて仕方がない。今日、私の題に書きました、「本当の自由、確かな希望そして本当の愛」という、その中に生きてほしい。そういう充滿体になってほしい。

その神さまの願いをもってモーセを導き、出エジプトの過程で十誡を与え、そしてトレーニングをなさったけれども、人の側はみんな背そむいてばかり。幸いをいただく間は、パンをいただいている間は、お水がある間は、「モーセ、モーセ」と言たって讃たたえている。ところが、水がなくなるつぶやと呟つぶやきだして、

「エジプトがよかった。あそこでは奴隷だったけれども、パンがあった、肉があった。またエジプトへ帰りたい」

と。これがイスラエルの民の呟きでしょ。旧約聖書をご覧になると、モーセはそれでどれだけ

苦勞しているか。ある時には天からマナが降ってきました、ある時はウズラが食物の代わりになった。そういったモーセを通して、いろんな御業を通して、

「養うのは私だよ」

ということを神さまは言っておられるけれども、民はその時だけの三日坊主。しばらくして、試験がやってきましたと、「エジプトがよかった、エジプトがよかった」と、そのくらいに人間というのは信じられないんです。

あの「十誡」というものをモーセはシナイの山でもらいました。もらいに行つて、四十日四十夜、山に籠もっている間に民は何をしていたか。モーセは帰つてこない。偶像を造つた。アロンが皆から金を集めて、それを溶かして金の牛を造つた。モーセはそれを怒つて十誡の石の板をぶつけて壊しました。そしてもう一度、モーセは板をもらいに行つた。そんなことが旧約聖書に書かれています。

ああいう姿というのは実は、イスラエルを一つのモデルにしながら、人間の本性、我々はどうんな人間かということを表わしている。いかに我々は不信心か、己が可愛いかということ。

●善き方は天の父のみ

そういうなかで、キリストという方はどうですか。

「父よ、なんじの御意を成させたまえ。あなただけが私の生命です」

と、それを本当にやられた、あの荒野の試みに始まつてずっと。そのイエス・キリストの生涯を見ますと、すべて父の御意、それだけでしょ。富める青年が、「善き先生！」と言つてきたら、

「なぜ私のことを善きと言うか。善き方は天の父のみ」

と。そして、キリストがその富める青年に対して、

「永遠の生命がほしいのか。モーセの十誡にどう書いてあるか？」

「はい、姦淫するなかれ、盗むなかれ、人を殺すなかれ……と、私は全部守つてきました」

と富める青年は言いました。

「いや、一つ足りない。あなたの持つている持ち物を全部売り払つて、貧しい人に施しなさい。そうしたら永遠の生命を得られる。そして、私に従つてきなさい」

と、キリストは大まじめに仰つた。ところが、青年は富める人でした。「ああ、痛い所を突かれた。これだけは離したくはない。もうちよつと他のことを言つてくださいね、先生」ということで、悲しみながら立ち去つて行つたとあります。あの場面は蹟きですよね。

「富める者が神の国に入るよりは、駱駝が針の穴を通る方がやさしい」

なんて、キリストは言われますから、「誰も救われっこない」とペテロが言つたら、キリストは、

「人ができないことを神はなさるよ。神は何でもできるんだから」

と、そういう答えが返つてきている。その先は書いてない。普通の人ならば、「ああ、富める青年は可哀相だ。これだけとは思っているものを手離せ、そしてすつからかんになって私に従つて来いなんて。いったいどこへ来いと言うんだい!？」と思う。小池先生はこう仰つた。

「かの青年は富において自己を惜しんだ。これだけは手離したくないというものをキ

リストは手離せと仰った。それはできない。できないことに気づいて、「イエスさま、参りました！ 私はできません、助けてください！」と言ってそこで平伏せば、リストはニコニコして、「できないことはわかっているよ、よく気づいたね。何も捨てなくていい。神の祝福が君の上にあるように。大事なことに気づいたね、人間は自分の力では救われっこない。救ってくださるのは神さまの恵み、実力、それだけだよ」と。そういうことに青年が気づけば良かった」

と。キリストのなさっていることは、あの「姦淫の女」が捕らえられるところもそうでしたよ。人々が女を連れてきて、

「彼女は姦淫の現場で捕まったんです。モーセは、『石打ちにせよ』と言っているでしょ。さあ、イエスさま、あなたはどうかなさいますか!？」

と迫ってきた。イエスは屈^{かが}んで地面に何か書いておられた。人々は烈しく迫ってきた。まだ夜霧にむせぶ夜明け方ですよ、そういう時にやって来た。プライバシーも何もあつたものではない。人の住まいに乗り込んで、捕まえて引きずり出してくる。男の方は知らん顔。女性だけを連れてきて、「石打ちにしろ！」とモーセは言っていると。さあ並の法律家なら困りますね。「そんなものは無効だ」と言ったら、これはモーセの法律を犯すのは神に対する大変な反逆ですから、最高裁判所といえどもこれはできない。「石打ちにせよ」と言えば、

「やはりイエスは口先だけの酷^{ひど}い人だ。愛を説きながら、いざとなったら石打ちにする残酷な人だ。どうだい、諸君、わかっただろ、イエス・キリストの正体を」

と。どっちに行ってもだめ。それでイエスは迫りくる者たちに、すつくと立ち上がって、

「君たちのうち罪なき者、まず石を取れ、石を投げよ」

と、権威ある声で仰った。そうすると、誰も打てない。「罪なき者、まず石を投げよ。罪なき者、石を取れ」という。自分に罪があるではないかと。キリストの「罪」というのはすごいですよ。心のうちで善からぬ思いを抱いたならば、それは憎しみなら殺人に通ずるし、色情をいだいて女を見たら姦淫に通ずる。これはもう外に表れた罪ではない。内側を見られますから、これはゴマカシがきかない。それでグツと見られますと、全部見えてしまう。年取った者から一人ひとり立ち去って行つた。そして最後には、その女性ひとりが残つた。

「女よ、誰もあなたを罰する者はいないのか？」

「はい、誰もごさいません」

「私もあなたを罰しない。これからは罪を犯さないように」

と、帰された。ああいう場面に出会いますと、私は涙がこぼれます。我々のキリストは、「あなたのその罪は赦された。あなたは今は石打ちにされなかった。その石打ちの罪は私がかぶるから」

と。ただ赦したのではない。人の受くべき罰——神さまは厳しい神さまでですから——必ず罪に對しては罰、これは鉄則です。

「それを全部、私がひつかぶるから、あなたは安心して行きなさい」

と。本当に十字架でそれを背負ってくださった。キリストには何の罪もなかったのに、石打ちにされた。いや、石打ちではなく、突き刺された、十字架にくぎ付けされた。イザヤ書53章に、

「この人には何も罪がないのに、彼は神に打たれ、罰せられたのだと我々は思った。いや実はそうではなかった。彼は我々の咎^{とが}のために傷付けられ、我々の罪のためにあのような目にあつてくださったのだ。我々の罪を背負い、病を背負うことによって、我々に健やかさ、生命を与えてくださったのだ」(イザヤ53・4～5)

ということがちゃんと預言されている。ああいうものにぶつかりますと、本当に私はイエス・キリストという方の前には無条件に頭を下げます。単なる言葉の人ではないですもの。言葉に力がありましたよ。けれども、それ以上に行うで——33歳のわずかの生涯ですけれども——その生涯の終わりにおいて、本当にその心で語っておられた。

「敵のために祈れ」

と。また、十字架の上から、

「彼らを赦してやってください。彼らは何もわからないでやっているのですから」と言つて祈られた。私はそういうものに打たれます。

●キリストの復活ほど自然なことはない

そして、キリストは死につばなしではない。あの方は光ある姿で、輝く姿で現れてこられた。これが「復活」ということで、ヨハネ伝なんかに表れています。私が、復活ということがわからないで苦しんでいた時に、小池先生は仰った。関西の西宮のある教会で復活節に講筵^{こうえん}された時に、

「新約聖書に復活の記事が何一つ書かれてなくても、私はキリストの復活を無条件で信じます。なぜか。あのように神に自分を献げきつて、神の御意^{みこころ}のみに生きたその義人。「義人」というのは正義の人ではない。神の御意を100%に行ずる人。神の御意を100%に貫く。自分にそれが有利であろうが不利であろうが、そんなことは問題ではない。たとえ自分の身を捨てることがあつても、「御意なるが故に」と言つて自分を献げていく。これが義の姿です。

「義人なし一人だになし」とパウロは言っている。それはそのとおりだ。ところが、例外が一人いた。イエス・キリストという義人。この義を貫いた、そしてその義は愛への義です。人を生かす、人を赦す、人に生命を与えたい、という神の御意を一身に背負つて、自分が罪を背負った。罰を受けた。そういう神さまの御意を貫いた人。この義人が死につばなしであるはずがない。彼は必ず栄光の姿で現れてくる。それが復活と言われていることだ。これほど自然なことはない」

と言われた。私はなるほどと思った。これが神さまの本当のことわり、理です。神さまの世界というのはすごい法則の世界だなと。罪に対しては罰というのも一つの法則でしょ。

神の御意を生き抜いた人は必ず生きる。預言者エノクだつて、そのまま「見えなくなり」と天国へ行つてしまった。エリヤは火の車に乗つて天に行つてしまった。当然、キリストのようなお方は、火の車に乗つて行つて当たり前なのに、あの十字架の死を遂げられた。そして、地獄にまで行つて、地獄で苦しんでいる者たちを引き連れて、そして天に昇られた。凄なお方です。だから、その方が輝く姿で現れてこられる。もはや肉体ではありません。復活された時に、

「この釘跡に指を差し込んでごらん。脇腹に触ってごらん」

と、トマスに言われた。

「あなたは見たから信じたのか。見ないで信ずるのが幸いなんだよ」

と言われた。そういうキリストなんです。

その方はもはや十字架で苦しんでおられるキリストではない。本当に輝くキリストです。その方が我々の目の前に立ってくださる。そういうキリストに私たちは包まれている。それが私の現実、今の現実です。昔は悩める私でしたけれども今は違います。そういうキリストが目の前に立ってくださる。そして、私を引き寄せてくださっている。そういう思いがする。そういつたキリストを私にリアルに示してくださったのが小池辰雄という先生だった。その方が無教会出身であろうが、何であろうが、私にはどうでもいいことです。私にとってはそのようにリアルにキリストの世界を、そして私が苦しんでいた学問の世界と神さまの世界、その矛盾、苦しみ、その解決の道を示してくださった方です。そして、

「キリストは本当に私たちに自由を与えようとして来てくださったんだよ、苦しめるためではない。ご自分のあの生命、それを私たちに無条件にくださるのがキリストの御意だ。幼子の心でそれを受けとってごらん」

と。人間は頭がじゃまして、我^がというものが邪魔して受けとれない。キリストは言われた、

「^{おななこ}幼子のようにならなければ天国を受けることができない。幼子のような心にならなければ、天国に入ることができない」

と。また、ユダヤ人の宰^{つかさ}のニコデモが、

「お母さんの胎から生まれて、もう一度どうして二度目の誕生ができるんですか？」

と聞いたたら、キリストは

「人は新たに生まれなければ、上から生まれなければ、神の国を見ることはできない。神の国に入ることができない」

と言われたものだから、ニコデモはすっかりあわてました。

「どうして、そんなことができるんですか!？」

「人は、肉から生まれる者は肉だ。霊から生まれる者は霊だ」

「霊から生まれるとはどういうことですか？」

「風を見てごらん。風は吹いているね。でも、風そのものを見た者は誰もいない。どこからきて、どこへ風は行くのか、誰もわからない。霊から生まれることもそういうことだよ」

と、キリストは言われた。ヨハネ伝3章にあります。そのように、

「霊から生まれる、新しく生まれる」

これが大事なんです。私たちは相対次元に、この見える世界に生きています。根っこの世界を知らない。根っこの世界を慕って——いや、根っこの世界というか、本当に天に向かつての世界です——そういう絶対次元、神さまの世界、キリストの世界、そこへの欲求を持っています。

何とかそこへ行きたい。けれども、行けない。その絶対次元からくるいろんな啓示があっても、それを肉の思いでゆがめて受けとってしまう。どうしても、この相対次元、肉の世界のそういう束縛から自分で脱却できない。ところが、神さまの世界とは何か。上から常に来ているんです。本当に上から来ている。絶対次元から相対次元に切り込んできて、しかも、切り込んで相対次元を絶対次元に引き上げようとなさっている。これが実は神さまの世界だということです。

●イスラエル民族の原体験

それは旧約聖書からずっと貫いている。イスラエルの民族はそのために選ばれた民です。模範生だから選ばれたのではない。うなじこわくして不信仰で、どうしようもないちっぽけな民族で、そのどうにもならんイスラエルをよりによつて選ばれて、それを訓練なさる。

アブラハムに始まり――「アブラハム・イサク・ヤコブの神」という――ヤコブに12人の子供がいて、ヨセフは末つ子で素晴らしかった。けれども、兄弟たちに妬まれて、エジプトに売られて行つた。しかし、そこで黙々と働いて、とうとう宰相さいしやうの地位にまで昇り詰めた。ヨセフは神の智慧が働いたから、いろんなことをして本当に重用ちやうようされた。飢饉を預言して備蓄をした。そしてやがて飢饉がやつてきた。エジプトには穀物がたくさんある。それで、カナン地の大飢饉の所からエジプトへ兄弟たちがやつてくる。遂に兄弟たちとの対面が実現して、とうとう最後にヤコブがやつてくる。イスラエルの民がエジプトへ来て、そこでパロ(ファラオ)の寵愛ちやうあいを受けて大事にしてもらうけれども、代が変わつてくると、イスラエルの民が増えるようになる。増え広がるということは、勢力が強いということですから、今度はエジプトが恐れをいだいて、イスラエルの民を苦しめる。奴隷の苦役くえきの状態が続く。アブラハムの時に既に、

「4百年後にアブラハムの子孫はエジプトで苦しむ。その苦しみの中から私は助け出す」

ということをちゃんと預言しておられます。それがモーセによつてなされるわけです。モーセだって、パロの家に拾われて、そこで育つた。40歳の時に自分のイスラエルの同胞がエジプト人にいじめられているのを見て、たまらず血がさわいでエジプト人を打ち殺して助けてやる。ところが、その翌日に今度は、イスラエルの同胞同士がまた喧嘩けんぱしている。

「お前たち、仲間だろ。喧嘩したらだめだ」

「あんたは、昨日、エジプト人を打ち殺した。今度は俺たちを打ち殺す気か」

と言うものだから、恐くなってミデアンの荒野へ逃げて行つた。そこでひっそりと40年間暮らした。80歳のモーセに神さまが現れてきたでしょ、「燃える柴」のくだりのところで。あれは劇的です。その時に神さまは何と言ったか。

「お前を用いて、イスラエルを助ける。イスラエルの民が苦しんでいるから」

「私のような老人をどうしてお用いになるのですか？ だいいち私をイスラエルの民は信じてくれません。昔、若かりし頃に、助けようと思ったら、受けてもらえなかったから」

「いや、いや、そうではない」

「では、行きますけれども、あなたのお名前は何ですか？」

と聞いたときに、

「私は有りて在るもの」

と訳されています。小池先生はそれを、

「有りて在らしめるもの」

というふうに、文法的にも読めると仰った。そのひらめきは、太陽の存在の在り方から得られた。ある時――先生がハンプブルクへ日本文学の先生として交換教授に行っておられた頃(1961〜1963)――太陽が雲間を貫いて射し込んできて、それが湖を照らしていた。その太陽に打たれた。太陽というものは存在することが即、地球をして命づけているではないか。太陽がなかったら、地球は真つ暗で、地球は存在できない。太陽の引力によって地球は太陽の周りをグルグル回っている。日本は有り難いことに春夏秋冬がある。四季のいろんなうるおいがある。そして、太陽の光によって命あるものは命付けられている。地球上のありとあらゆるものがそれによって生きている。その太陽が存在することが即、地球をして命づけている。神さまというのはそういうお方だ。在るというお方が他者を在らしめる。これが本当の在り方だということに気付いたと仰る。

モーセはその神さまから力をいただいて、杖一本でパロの所へ行つて、あのようにしてエジプトをやる。そして、十誡をたまわる。モーセを通して解放されたのがイスラエルの民族にとつての原体験の第一です。出て行く時に、鴨居に羊の血を塗った。そうすると、疫病がきても、そこは全部避けて行つた。「鴨居に血を塗る」ということは、「キリストの十字架の血」を指している。その血の塗つてある所は、疫病はみな避けて行つて、塗つてない所のエジプト人の長子^{ちやうし}はパロの長子も含めて、全部死んだという。それでとうとうパロは心を開いて、イスラエルの民を解放したわけです。

それが第一の体験です。あれはモーセというものを通してですけれども、モーセを通してエホバの神さまが働いた。エホバの神さまは高い所に鎮座します神ではなくて、下つてきて、モーセと一緒に働いて、現実^{じじつ}に苦しみの中から助け出すという。つまり「出エジプト」というのは、苦役からの解放、奴隷状態からの解放であつて、紀元前1290年頃のことです。

私は今日の要約のところで、「外的制約」と書きました。人間は様々な不自由で苦しんでいます。外的制約、あるいは内的な病気とか、そういう人間を苦しめるいろんなもので苦しんでいますけれども、そこからの解き放ち、それをこの旧約聖書の話はシンボライズ「象徴化」している。これは紀元前1100年頃の話です。

それから次に、イスラエル民族にとつての原体験と言うべきものが、バビロン捕囚からの解放です。せっかくそうやって、神さまの働きにより、エジプトから解放されたにもかかわらず、また背^{そむ}き続けているものだから、とうとうバビロンに捕らえられてしまった。あれは紀元前586年のことで、北イスラエルは滅びて、イスラエル民族の主立った人たちがバビロンへ捕虜になる。その時は奴隷になったわけではありません。けれども、祖国を失うわけです。詩篇の中に、

「祖国から遠く離れた所で祖国を思いながら涙を流している」

という歌があります。「嘆きの壁」というのもそういうところから出てきたわけでしょう。「帰りたい、帰りたい」という嘆きが50年間続きました。結局、ペルシャ王クロスを通して、解き放

たれて帰ってくる。これは背きの罪に対する赦し、解き放ち。これも神さまの力によってなされた。イザヤ書40章という所に、

「慰めよ、慰めよ、わが民を慰めよ」

という、素晴らしいところがあります。

「払うべき刑罰に対する償いは終わった。だから、もう帰ってこい」

という、あのイザヤ書40章というのには素晴らしい。そのことが実現した。

それから、同じイザヤ書の42章とか、いろんな所に「主の僕しもべの歌」というのが七か所出てきます。たとえば、42章だったら、

「わが助くるわが僕、わが選びしこの選び人を見よ。われ彼にわが御霊みたまを与えたり」

というところから始まって、彼は囚われ人を解放して本当の自由を得させるといことが出てきますし、それからさっきの53章に苦難の僕の歌があります。それから、61章になりますと、

「あらゆる囚われの中にある人を解き放つ」

という言葉が出てきます。しかも、ルカ伝の始めの所では、イエスは安息日に会堂に入って、イザヤ書の中のを開いて、この61章1節から3節を読まれた。「貧しい者への福音」という、

「主は私に油を注ぎ、主なる神の霊が私をとらえた。私をつかわして貧しい人によい知らせを伝えさせるために。うち砕かれた心を包み、囚われ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために。²主が恵みをお与えになる年、私たちの神が報復させる日を告知して、嘆いている人々を慰め、³シオンのゆえに嘆いている人々に灰に代えて冠をかぶらせ、嘆きに代えて喜びの香油を、暗い心に代えて讚美の衣をまとわせるために」(イザヤ61:1-3)

と。そして、ルカ伝の始めのところですね。第4章、荒野の試みから帰ってこられて、

「¹⁴イエス御霊みたまの能力ちからをもてガリラヤに帰り給えば、その声聞あまねく四方の地に弘ひろまる。¹⁵かくて諸会堂にて教えをなし、凡ての人すべに崇められ給う。¹⁶諸その育さてられ給いし処のナザレに到り、例のごとく安息日に会堂に入りて、聖書を読まんとて立ち給いしに、¹⁷預言者イザヤの書ふみを与えたれば、其の書を繙ひもときて、かく録しるされたる所を見出し給う。¹⁸『主の御霊みたまわれに在います。これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣のべしめ、我をつかわして囚人めしうどに赦ゆるしを得ることと、盲人に見ゆることを告げしめ、¹⁹圧おさえらるる者を放ちて自由を与えしめ、²⁰主の喜ばしき年を宣伝のべつたえしめ給うなり』²¹イエス書を巻ふみき、係の者に返して坐し給えば、会堂に居る者みな之に目を注ぐ。²¹イエス言い出でたもう『この聖書は今日なんじらの耳に成就したり』(ルカ4:14-21)

こういう宣言をなさった。旧約聖書にイザヤの預言で語られていることが今日あなた方の耳に既に成就していると。遠い昔に語られたこれからの将来のことではない。今、そこでそれが成就している。私を本当に受けとるならば、それが成就していると。これが本当の聖書の受けとり方なんです。「いつかそうなるでしょう、それまでは苦しんでおきましょう」と、そんな世界ではない。「今直ちに」ということ。それをキリストは与えようとしてくださっている。そういうことで、さきほどの出エジプト、十誡、それから出バビロニヤ、ああいったことの

本当の解放というものの、解き放ち、これはイエス・キリストを通して初めてやってくる。しかも、あの苦役からの解放にせよ、罪からの解放にせよ、根本的には自分自身、己というものがもつ罪、それを根源的に解決してくださる。枝葉の問題の解決だったら、同じことの繰り返しをしなければいけません。人間はいくらでも罪を犯す。赦してもらってもまた罪を犯す。それではいくらたつても仕方がない。根源的に存在そのものを贖い切るというこの御業、これはイエス・キリストしかなしえない。それをキリストはなしてくださった。

●十誠は十言

小池先生はこういうことも仰った、

「あの十誠は十言だ、十の言だ」
じゅうげん ことば

と。「十の言」とは何かというと、普通、「すべし、すべからず」という律法というふうにとらえる。しかし、違う。あれはたとえば、

「汝、わが顔の前に何ものをも神とすべからず」

とある。つまり、偶像を禁止して、「神とすべからず」という。しかし、そうじゃない。あれは、

「イスラエルの民よ、お前たちにとっては、私は神ではないか。力ある手をもってお前たちをあのエジプトの苦しみから解き放った、そういう実力者である神ではないか。

そういう私がお前たちについている。お前たちにとっては、私以外の神なんかあろうはずがない」

という、民を信頼し愛して語りかけている言葉であると、そう仰った。「すべし、すべからず」だったら、これは縛られます。そうではなくて、

「私はお前の神だろ、父だろ。お前は子だろ。だったら、お前にとっては――世間にはいろんな神々があるだろう、異民族にも民族にはみんな民族神があるけれども――イスラエルの民は、お前たちにとっては私だけが本当の神である」

と。そういう一対一の結びつき、それを宣言しているんだよと小池先生は言われた。

「殺人すべからず、人を殺すべからず」

という言葉は、

「私がお前の神であるならば、お前は殺人なんかするはずがない、できっこない。私はお前を信じているんだから」

と。これは親と子の関係と同じだよと仰った。「誰もお前を信じなくても、お父さんはお前を信じているからね」と、子供を信じかかって言ったら、子供だつてうれしいだろう。みんなからボロクソに言われて、「あいつは不良だ、けしからん」と、石打ちにされようとしている時に、「父ちゃんはお前を信じているからね。お前を石打ちにする人の前に私は体をはるよ。俺を先に石打ちにしてみろ、文句ないだろうと、体をはるからね」と。そういう親父だつたら素晴らしい。十誠の言葉はそういう

「信愛の断言命法だ」

と仰った。すべてそういうふうに理解すると、そこから派生的には、

「だから、人を殺すのではないよ」

という命令であつたり、禁止であつたりが出てくるでしょうけれども、それは結果であつて、本来は断言的に、

「お前は殺人なんかするはずがない。お前は盗みなんかするはずがない。お前は隣人の妻を貪ることなんか、そんなことは絶対しない」

ということ。それを示している証拠に、あの旧約聖書のレビ記というのがある。そのレビ記19章をみると、十誡がもう一回出てくる。その十誡のたびに、

「私は主である」

というのが全部付いている。枕詞でなくて、重しの言葉として、「私は主である」と、一つ一つのその十誡の言葉のお終いに「私は主である」と書いてある。つまり、

「私が主であるから、お前たちはそんなことをするはずがない」

と。そして、一番大事な誠命はというと、申命記の中の、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして主なる汝の神を愛せよ」

というのと――二つありますね――もう一つは、

「己を愛する如く隣人を愛せよ」

という、レビ記19章の言葉をキリストは引つ張ってこられた。そんなふうに、やはり旧約聖書の歴史の中で大事なことを、太い筋をしつかりつかんで、「これだよ!」と言って差し出されたのが実はキリストなんです。

一見、安息日の律法だとかいろんな細かい律法には反するようなことをキリストはいつぱいなさったでしょう。よりによつて安息日にばかり人を癒したりなさっているから、余計彼らはいらだちました。「俺たちの宗教を否定するのか!」と。キリストは律法を本当の姿に回復しようとした。しかも、本当の姿に回復することによつて、自分がどんな酷い目にあうかというのを百もご承知の上です。だから、ある時から弟子たちに、

「人の子は捨てられ、唾せられ、鞭打たれ、遂に十字架にかけられ、そして三日目に甦る」

ということを何度か告知されます。そして終わりの方で、山の上で素晴らしい姿に変貌されます。ああいうところを見えますと、本当にキリストという方は自分の定めというものをよく自覚なさっている。だんだん危機が迫ってきます。とうとう最後の晩餐、そしてゲッセマネの祈りです。あの祈りの時に弟子たちはみな眠りこけていました。キリストは本当に苦しんで祈られました。今まで神さまと一つで来たのに、今、引き離されようとしている。未だかつて体験したことのない世界へ突き落とされようとしている。

私たちは三日間、神さまと繋がっていなくても、平気な顔している。「ちよつとこの頃、内面が暗くなってきた。あつ、そうだ、神さまに帰らないといけない。キリストに祈らなければいけない。ちよつと御無沙汰しました、申し訳ありません」と、聖書を開く。それが我々です。キリストという方は神さまの懐の中に抱かれている方ですから、夜を徹して山の中で祈っておられても、ちつともあれは難行苦行でも何でもない。神の懐にいだかれているお方ですから。

●無者キリスト

そのように、キリストは

「私を見た者は父を見た。私と父とは一つだ」

と仰った。すべて自分の内面の姿をそのまま仰っているだけなんです。

「自分は父から遣^{つか}わされた。遣^{つか}わされた者は遣^{つか}わし給^{たま}うた方の御意^{みこころ}をまつすぐに行うこと、それだけだ。本当に神の御意を求める人ならば、私が言っていることが自分本位でしゃべっているのか、父から『しゃべれ』と言われたことをしゃべっているのか、そのことは自^{おの}ずとわかるはずだよ」

と、ヨハネ伝に書いてあります。

「私は自分から何も言えない。自分からは何も教えるものは持たない。私は何もでもない。何もできない。すべて父が『せよ、語れ』と仰ることを、その御声のままに自分はやっているだけだ」

と。それを小池先生は「無者キリスト」と言われた。自分がないから、自分は空^{から}っぽだから、自分を神の前にゼロにして差し出しておられるから、そこに神さまという無限無量が宿る。だから、

「ゼロ・イコール・無限大」(0=∞)

と仰った。「無者」というと躓きますけれども。これは一つには、己を神さまの前に何ものともしていない、からっぽで投げ出している姿を「無」という言葉で表現した。それから、「無限無量」という、限定できないものが宿る。「無」という字は、「天蓋^{てんがい}の下に甘^{にじゅう}と甘^{にじゅう}の林」と書いたのが起源らしい。「ああ、漢字は素晴らしい」と小池先生はよく言われました。つまり、

「無は無数だ」

と。無数の木が林立しているときに数えようがない。数が無い、もう数える数が。だから、「ゼロ」という「無」と、「無数」「限定できない」というのが繋がっている。キリストは「ゼロ」であると同時に、神さまという「無限無量」なる方がその中に宿っておられる。だから、この方を表現するのに、「無者」としか表現の仕様がなない。これが「無者キリスト」と言われた由来なんです。

「キリストは愛なり」と言ったら、「愛」という言葉で限定してしまう。「キリストは義なり」と言えば、「義」という言葉で限定してしまう。「キリストは神なり」というのも何か誤解を招きますね、父なる神と一つだから。ということになると結局、「無」という言葉で表現するか仕様がなないといって「無者キリスト」と言われた。キリストは自分を完全に神に献げきつていかれた。そういう姿で我々もありたい。ところが、我々はそういう在り方ができない。何がじゃましているのか。結局、自我という、「罪」というやつがじゃましている。小池先生はあの、

「恵^{さいわい}福^{ふく}なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

という、この霊の貧しいキリストに天国が充滿していた。自分もそういう姿になりたいと思うけれどもなれない。それで苦しんだ。キリストのように、自分を神に献げきつてからっぽになつて、神さまが充滿して、そこから流れてくる愛の御業^{みわざ}がほとばしり出る。そして永遠の生命でしょ。そういう姿に自分になりたい。しかし、なれない。そこで苦しんだ。その時に、あの言葉は、

「幸いなるかな、汝、小池辰雄よ。わが十字架において既に霊貧しくされている小池よ。」

聖霊の我、復活の我、汝の中にあり」と、
と、こう響いてきた。それで本当に全身しびれて畳の上におつ倒れた。そしてキリストを讃^{たた}えた。「これだ!」と。「無になりたい、罪無き姿になりたい。しかし、なれない。そういうお前

の問題を全部私が十字架で片付けたではないか。小池辰雄よ、お前の過去も現在も未来も、お前という全存在を私は完全に贖いとった。お前はもう無いんだ」と。「ああ、そうですか!」と。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」

という、ガラテヤ書2章20節のパウロの告白はこれだったんだと、気付かれた。古い私は完全に十字架でもう死んでいる。生身なまみの自分はこの世に生きている。しかし、

「一番深いところでは、神さまの絶対次元では、あなたは既に死んでいる、葬ほうむられている。もうあなたは罪無き者だ。喜べ喜べ」

と、キリストは私たちに呼びかけてくださっている。そして、十字架で完全なからっぽにしてください、掃除をしてください。

この「聖霊のバプテスマ」という言葉はよく躓きになるんです。使徒行伝2章のような、

「火のようなものが降くだってきて、一人びとりの上に宿いげんって異言で神を讃たたえた」

と。あれは本当に教会の歴史では、聖霊が降ったペンテコステとして歴史的な出来事で、あそこから本当のキリストの教会が始まっていく。あれは歴史的事実です。キリストが復活されてから五十日目に起きた。けれども、あれは一つの歴史上の出来事ですけれども、本質的には神さまの絶対次元では、十字架と聖霊とは一つ、ワンセットで私たちに臨んでくる。二段構えではない。

「完全に十字架であなたを贖った。わかったか!」

「はいっ、わかりました!」

と、答えた瞬間に聖霊が我々の中に宿る。せつかく清めてくださった私たちの中に変な悪霊が来たら困りますもの。せつかくご自身の尊い血潮で私たちを潔めて罪無き者にしてください。そこに聖霊という方が宿って、その方が常に天界と結び合わせてくださる。

「聖霊、言い難うめき呻ときをもて執り成し給うなり」

とありますように。ヨハネ伝だったら「助け主」と書かれています。

「やがて、あなたたちに助け主を送る。その方が来られたら、その方は私に栄光を得させる。私が今まで語ったことが全部わかるようになるから。その方は平安の霊だ。私は平安をのこしていく。誰も奪うことのできない平安をあなた方と与える」

と。私の経験からしますと、私は本当に小池先生の仰る十字架がなかなか受けとれなかった。どこかで自分にひっかかっていた。ところがもう、私は本当に万策が尽きまして、

「これは理屈ではない。いくら考えてもわからない。もう無条件降伏しよう」

と——ドイツ留学中(1961～1964)のことでした——そう思いまして、朝の夜明けの3時頃までずっと私は悩み、考え続けていた。

「もう万策尽きた。そうだ、この十字架のキリストの御前に自分を投げ出そう」

と思って、委ねたんです。そうしたら、スーッと何か開けたように思った。今まで自分を苦しめていたものがスーッと消えていって、何かある種の喜びに満たされた。そういうことがあります。そのことをすぐ小池先生に手紙で書いたら、

「奥田君、よかったね。君はひとつ先へ進んだんだよ」

という手紙が返ってきました。私は何も全身が痺れるとか、異言で神を讃えるとか、そんな体験は何もないんですよ。何もないんだけど、そういう時に、

「本当に自分を完全に委ねよう、このキリストの十字架の前に絶対に降参しよう、これは理屈ではない」

と。人から、「そんなものはむしがよすぎる。もつともつと、お前は苦しまねばだめだ。お前はもつともつとすべきことがたくさんある」とかいろんなことを言われても、もういいよ。私はもう万策尽きた。その委ねた時に何かしら自分の中に入ってきた。そんなふうに思った。それでスーッと気持ちが楽になった、平安が宿った。「これでいい、これでいく」と。そういうことがあった。ですから、本当に十字架の有り難さの前に全身涙で祈り心で、

「主さま、ありがとう！ あなたの十字架ですべてのことを成し遂げてくださったんですね。私のすることは何もないんですね」

「そうだよ、お前なんか出来るのなら、私は苦しまないよ」

と。そうなんです。我々が自分で自分を完成して、自分で神さまに喜ばれるような人間になれるのなら、何もキリストがこのこと下りてきて、この地上で苦しんでくださることはなかった。預言者だけで充分だった。けれども、預言者たちがいくらやってくれても、だめだった。そこで最後の切り札としてイエス・キリストがあのようにしてお生まれくださった。聖座を捨てて、マリアの中に宿り、そして人として育ち、いろんな下々の苦勞を味わって——あの讃美歌121番に由木康〔1896～1985〕さんの「この人を見よ」という讃美歌がありますね——あのとおりああいうことをやってくださったって、自分のためには何一つお求めにならなかった。あの方が語られたのは、ただ父の御意、父の愛というのがどんなに大きいか。人間はどんなにケチンボウか。自分に善くしてくれる者のためなら親切にする。でも、自分を憎んだり呪う奴には、「この野郎！」という気持ちをいだく。これが本性ですもの。ところが、キリストは、

「そういう者たちのためにこそ祈れ。天の父を見ろ。善き者にも悪しき者にも陽を昇らせ、雨を降らせる。汝ら、天の父の全き如く全かれ」

と言われた。「そんなこと出来つこないや」と思うけれども、キリストはそういうことを行つたお方です。そのお方が地上にきて、一時的にはみな喜んでキリストを讃えました。けれども最後はみなキリストを捨て去った。群衆は頼りになりません。煽動されるともう一緒になつて、「十字架につけろ、十字架につけろ！」と言ってキリストを殺してしまう。そういう罪深い、いい加減なご連中です。

それはなにもイスラエルのことだけではない。我々もみなそうなんです。我々は、御利益を約束し、幸せを約束し、「こうやったらこんな結果が得られる」というものを約束してくれたら、「それでは、やりましょう」となるけれども、そうでなかったら信じようとしなくて、受け入れようとしなくて。これが肉の弱さですね。いろんな宗教があつて、ゾロリゾロリとたくさんの人が伴いていきます。それは何らかの意味において、この世的な幸せを約束しているからです。「百万円を持つてきなさい。これだけの報いがありますよ」とか言う。つまり、お金で、努力で買えるものを提供するわけです、商品として。それだったら、人間はやっていくんです。ところが、「何を出せばいいんですか?」、「何もいらない。お金で買えるようなものではない」。「どんな立派な行いをしたらいいですか?」、「立派な行いではだめだ」。「どうしたらいいんですか?」、「ただ受けとりなさい」。「そんなもの、受けとれるもんですか!」というのが人間の

プライドですわ。ところが始めに申しましたように、自律の人間、自分で自分を律して努力していく人間がいろんなことに会って、それは自然災害のこともあります、天災、あるいは人災、いろんな災いが臨みます、人間には。外からくるもの、内からくるもの。それから、家族の思い、病氣、いろんなものがあります。そういうなかで、人間というのは何とちつぽけな頼りない儂い存在^{はかな}だろう。今日生きていても、明日ということが約束されていませんもの。不幸な目に出会った時に、「神も仏もあるものか!」と言って人は呪うんですけれども。

「それではあなたは、神さま、仏さまに本当に自分を献げてきましたか?」

「ノー、ノー、ノー」

と、こういうのが人間ですから。そういう人間の姿を見ますと、それが人間だと思う。神さまの側からすると、イスラエルの始めからずつと、何とかして人間を自由な生き生きとした、あの「アダムとイブ」の最初の世界のように、幼児^{おさなご}のように喜々と喜び、神さまと交わり、生命にあふれて生きていくという世界を与えようとしてくださっているのに、いかんせん人間の本性はそれに背いた。背きの連続だった。これがイスラエルの歴史を通して私たちが学ぶことだと思います。

●同じ太陽の光

イスラエルの歴史にとってなお不幸なことは、未だにキリストを救い主として受け入れないという現実です。そこで救いは我々異邦人に及んだ。パウロの異邦人伝道を通して日本にもやってきた。私たち日本というのは素晴らしい民族です。早くから仏教や儒教を受け入れました。それから、いろんな方が中国へ渡って、仏教の極意を持ってきて、鎌倉仏教が栄え、戦国時代を通して本当に深められていった。朱子学が入ってくる。非常に文化程度は高い。霊が肥やされている。決して、魂の未開民族ではない。

そういうよく耕された所にキリストが明治の頃にやってきたわけです。キリシタンの時に迫害されて一度は絶やされましたけれども、明治の時再び入ってきた。そのときに残念ながら、技術は、文化文明は受け入れたけれども、「キリスト教は御免だ」と言ってこれを断つたでしよ。そして、不幸なことに富国強兵策をとり、天皇制という国家体制を強化し、天照大神^{あまてらすおおかみ}の神道の方に流れて行った。そして、特に大東亜戦争の頃は、キリスト教は弾圧されました。そういう不幸な歴史を辿ってしまった。そして戦後、国民は大変貧乏でした。「まず、御飯をくれ、パンをくれ、住居をくれ」と、この見えるもの、経済の豊かさを追い求めた。宗教は御法度^{ごはつと}になる。それで今日に至っています。せつかく日本のいい歴史的な魂の伝統が、本当にそこにキリストの精神が花開くべき時に、「ノー」と言ってしまった。それが現在につながっていると、私は大局的に見ている。

けれども、ありがたいことに、今は決して宗教弾圧はありません。「宗教教育はいけな」と言われているが、あれは、「特定の宗教を教えることはいけない」と言っているだけです。教師自身が人間として本当の生き方をすることはむしろ必要とされている。

「先生、あなたの生き方はどこからきてますか?」

「私の恩師はキリストです。私を命づけてくれるのはキリストです。目には見えないけれども、生きておられるキリストです。その方に私は帰依^{きえ}して、私は生命を日々にいただいている。あなたもいただいてごらん、素晴らしいよ」

と。窮屈なことはありません。何も窮屈なことはない。のびのびと本当の自由を与えたもう。確かな希望を与えたもう。御国みくにがありますからね。そして、

「希望は決して失望に終わることはない」

とローマ書5章に書かれている。決して失望に終わることはない。神が約束されたことは必ず成就する。絶対にそうなんです。我々の儚い願望はかなは願望で終わるかもしれない。けれども、神さまが「こうだよ」と仰った言葉は必ず成る。それをキリストは保証してくださっている。それがありますと、我々は将来というものがバラ色に輝いている。キリストがそこで待つてくださっていますから。そして、御国は必ず成る。御国のいわば先端が私たち一人ひとりの中に来ている。御国という現実が一人ひとりの中に来ています。それが聖霊という方です。さつきのローマ書5章にも書いてありました。

「神の愛が聖霊によつて我々の心に注がれる」

と。聖霊というお方は神さまが無条件に私たちにくださるプレゼントなんです。無条件ですよ。そのためにキリストが十字架で我々の罪を片付けてくださった。

神さまは、上から下へくだりたくてしょうがない。くだらない神はくだらん(笑)。くだる神が本当の神さまです。いと高き所にいます神がいと低きもの、名も無き者、そういう者の中に宿りたもう。イザヤの預言も、マリアの讃歌もそうでしょ。世に見捨てられた人、悲しんでいる人に、

「幸いなるかな、悲しむ者。幸いなるかな、今、泣いている者。その人は慰められる」

という。キリストは、

「私があなたの本当の喜びとなるよ、本当の慰めとなるよ」

と。今、飽き足りている人はもう満足しますから、それ以上のものはこない。でも、今苦しんでいる者、今悲しんでいる者、その者は豊かな祝福を受ける。ピンチはチャンスだ。マイナスと見えるところは本当の世界への道が開かれている。そうすると、うれしいじゃありませんか。今、富に誇っている人とか、人生の春を謳歌している人は、まあしばらくそれで行つてください。我々、それでは満たされない者、それにはご縁がなかった者には、ちゃんと神さまの側でこんな素晴らしい無限無量なものを用意して、差し出してくださっている。「代わりに何を献げるんですか?」、「何もいらない。しいていえば、あなたは神の子にされたんだから、御意みこころにかなうように」。「いや、自分でかなえません」、「聖霊という方があなたを導いていくから大丈夫だ。何も心配はいらんよ」と。

「聖霊」ということを言うと、教会ではあまりいい顔をされないとか聞くんです、「聖霊派」とか何々派とか言つて。そんなのではない。「助け主」——本当にキリストが天界にいらつしやるでしょ——そのキリストの霊が聖霊という姿で一人ひとりの中に来てくださる。昔、あのナザレを歩いておられた人たるキリストは、いくら私が日本から、「おーい、キリストよ!」と呼んでも、聞こえなかったかもしれない。ところが今、霊なるキリストは、「主さま! イエスさま!」と呼べば、直ちに

「もう、あなたの中に宿っているよ」

と。太陽だつてそうですよ。私はドイツに行つた時に見た太陽と、日本で見た太陽と、同じ太

陽を見ている。太陽の光が地上に出さえすれば、どの人にも光は来て、^{ぬく}温もりは感じます。中国の人、30億の人がいても、みんなその温もりを太陽はくれます。聖霊というお方、天界のキリストというお方は、何十億の人であろうと、無条件にその人の中に宿りたいと。そして本当にキリストの姿に化したい、神の形に本当に化したいと。それがキリストの祈りです。それをピリピ書であれ、コロサイ書であれ、エペソ書であれ、みんな書いてあります。

「私たちを新しい人につくり変える。そしてやがて、私たちはキリストと同じ姿に化せられる。それが我々の望みであるし、^{のぞみ}栄光の希望だ」

と言っています。こんな素晴らしいことはないですよ。

そして愛。キリストが持つほどの愛はない。キリストの愛に比べたら、我々の愛は、「愛するよ、君を愛するよ」なんてのは空しく聞こえます。恋人同士が愛し合っている。それがいつまで続くかわからない。いや、わかるんだしたら、あんなに離婚しないものね。状況が変われば、みんな変わってしまうんですもの、人間の愛なんていうのは。夫婦だけで良くて、周りとの関係が悪いよね、お姑さん^{しゅうとめ}と喧嘩したりとか。そんなことで、人間というものは、当事者がいくら良くて、妨げがいろんな形でやってきて、二人をつぶしてしまう。ロメオとジュリエットみたいに。ですから、本来、人間には愛がないと思った方がいい。

私には愛はない。愛したいけれども、愛はない。本当の愛はキリストから流れってくる。キリストというお方は愛の^{ごんげ}権化だ。この方が私に宿ってくだされば、私はいつしか愛の人にされる。愛というのは己を求めない。コリント前書13章に書いてありましょ。

「愛は妬^{ねた}まない、誇らない、自分の利益を求めない。愛は寛容だ。忍耐する。すべてを望み、すべてを信じ……」

と書いてありますね。結婚式の時、いつも牧師さんが読んでくださいます。ああいう愛は人から出てこない。あれはキリストご自身から出てくる。それは人にはないけれども、キリストは私の中にそういう愛を生み出してくださる。だから、私は言うんです、

「私には愛はないよ。人間的にいくら気持ちとして愛する気持ちはあっても、それは本当の愛ではない。キリストから流れてくる愛、それを信じてくださいね」

と。私がキリストと深く交わりが深まれば深まるほど——これは祈りですけれども——私は愛の人に化せられる。つまり、自分を求めなくなる。

●キリストと一つになって歩む

皆さん、よく「祈り」と仰いますね、「祈りなさい、祈りなさい」と。何を祈るんですか。「キリストさま、あなたが私と一つになってください。私いつも一つになっていてください、そこからいいものしか流れませんから。私の問題は全部解決されている。だから、あの人を救ってあげてください、この人の病を^{みこころ}御意ならば癒してあげてください、治らない病気なのでしたら苦しみをやわらげてあげてください、私は本当にあの人のことを祈りたいんです」

と。人のことをいっぱい祈る種はある。もう自分のことはいい。キリストが全部解決してくださっているから。そうやって我を忘れて祈っている姿が実に素晴らしい。我を忘れて人のために祈っている人はどんどんその人の魂が浄化されていって、キリストの姿に近づいていきます。私は、マザー・テレサ(1910～1997)という方はそういう方だと思う。あのアウシュビッツ

で身代わりになって死んだコルベ神父「1894～1941」もそういう愛の方だと思います。アッシジのフランチェスコ「1181～1226」もそうでしょう。ああいう方々は、本当にキリストがその人と一つになって、キリストに在って、キリストと一つになって歩んでいる人です。だから、「カトリックだ、プロテスタントだ、何々派だ」ということは、私にはどうでもいいことです。どれだけ、霊なるキリストと本当に一つであるか。キリストは仰った。

「私を見た者は父を見た」

と。今度は私たちは、

「私を見た者はイエス・キリストを見たんです」

と言えなくてはいけない。私なんかそうなんだ。私なんかだめですけれども。でも、私のうちにキリストが宿ってくたさる。「あなた方は聖霊の宮である」と書いてましょ、コリント書簡に、

「あなた方は聖霊の宮である。キリストがあなた方をご自分の十字架の血潮で、あの尊い代価で買いつけてくださった。あなた方はキリストのもの。キリストの霊が注がれている宮である。だから、その宮を汚してはならない」

と。宮なんですよ。聖霊という方が宿るための宮なんです、畏れ多いことに。神社参拝に行かなくても、自分のうちなるキリストを拝む。その自分のうちなる霊なるキリストに助けられて、

「主さま、お願いいたします。今日一日、よろしくお願いいたします」

と。何時間も祈らなくても、「主さま、よろしくお願いいたします。ありがとうございます」と。私の祈りはいつもそれです。道を歩いていても、「主さま、ありがとうございます。今日一日、よろしくお願いいたします」と。そう言つて、何かいつもキリストと一緒に歩んでいる人生というのは、本当に幸いですね。自分のことを忘れていきますと、自分を誇らないでしょ。それから、自分を責めない。私はそれまで、自分に責任を感じて、とにかく責めて責めて責めていた。「あなたは良心的すぎるんだよ」と言われた。けれども、もう私は責めません。私は無責任です。だから、私は裁判官をやっている時にもそう思つてやりました(註 最高裁判所判事に在任 1999/4/1～2002/9/27)。自分で負いきれるものではない。これは主さまに助けてもらわなければ。ただ私は祈っていた、

「正しい判断をさせてください。曇りなき目で物事を見させてください。私がわからないことは、主よ、どうぞ智慧をください」

と。答えが出ない時には、私は「一週間待つてくれ」と言つて、合議を伸ばしてもらった。そして、走ったりしながら祈っていた。そうすると、何かフツと、また資料に当たりますと、何だか答えが見えてきたりしたこともありました。だから、私は裁判官をしよう——今は大学の先生に戻りましたけれども——何をしようといつも、

「キリストの光の中でのものを見させてください。キリストの光の中で学生たちに接しさせてください」

と。そうやっていきますと、また学生たちも慕ってきてくれます。キリストのくださった世界は霊、肉、すべて全人格的にあらゆる方向に展開するようなものですから。

私はスポーツ大好きです。昨日も夕方、裁判所の職員の方々と皇居の周り10キロをちゃんと走りました、速いランナーに引つ張られて。今朝はちゃんとまた朝起きて、2キロほどはウォーキングで、あと3キロぐらい走った。それでこの講演に備えている。それをやりながら楽しい。

同志社大学ではまた、「先生と走りたい」というのが次々に現れてくるから、御所の中を走ったりできる。それから野球なんかもやります。うれしいんです。授業をやっても疲れない。学生の方が、「先生、どこからそんなエネルギーが出てくるんですか？ 自分なんか三つ先生の授業を受けたら、もう頭が疲れてクタクタになって、へばっているのに。先生はケロッとして、また走ろうと言っている。どうなっているんですか？」、「うん、どうなっているんだろうね」なんて(笑)。そういう生活なんです。

●無限無量なるキリストを世界に発信する

それから、人に対して感謝の気持ちが湧いてきますね。出会う人、出会う人が、これが有り難い方なんです。一期一會いちごいちえかもしれない。70歳なんて、人間生き生きの日野原ひのほら「日野原重明1911」(2017)さんから言えば、「まだ涙垂れ小僧だ」と言われますから、私も安心しているんですけれども。常識から言えば、70歳というのは一つの年齢ですね、70歳を越えますと定年退職です。でも、有り難いことに、70歳でそこで区切りができますと、そこから先は余生ということになります。余生がいつまで行くのかわかりません、これは神さまが御存知でね。

けれども、余生というのは有り難いことで、毎日毎日が上から流れてくる賜たまわり日々なんですよ。一日一日が無駄に過ごしたらもつたいない。一日一日、出会う方は神さまのお使いかもしれない。出会う方の中に、キリストが宿つていらつしやるかもしれない。そういう方と出会わしていただいて、そしてもうそれ切りかもしれない。こういう出会いというものを本当に大事にしたい。縁を結べるということは有り難いことだと。そんな気持ちで人々に接しますと、なんだか嬉しくなってくるんですよ。また、そういう気持ちが相手の方には伝わるのでしょいうね。だから、そんなに嫌われないで、いろんな人と縁結びができております。私は、天国というのはそういう世界ではないかと思う。

「神の国はあなた方の中にあるんだよ。天国はあなた方の中にある」

と、キリストが仰つてくださった。幼児おさなの心、幼児たちの世界、それはきたるべき天国の前味を味わっているのかもしれない。私たちはキリストに対する感謝、讃美、それが深まれば深まるほど世界に広がっていく。そういう思いをもつて、ピリピ書、エペソ書、コロサイ書、そういう所をご覧になつてください。同じことを書いてますよ。そう書いているのが私の中にきたから、こんなことを言うんだけれども。「ああ、同じことを言っているな」と。だから、聖書は教えるではない。あれは自分で体験して、

「あつ、同じことが書いてある。自分の住んでいる世界がこれで実証されているな」

と言って、確かめていく、そういう書なんです。「すべし、すべからず」という窮屈な書ではない。あそこに書いてあることと、自分の生活が合致すれば、「あなたの歩んでいる道は間違いない」という保証書だと。それで、キリストの言葉はありがたいね。

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ。われ汝を休ません」

と言う。私だつて、いろんな仕事を仰せつかりますと、やはりへばるんですよ。もう日がなくなつてしましょ。そしたら、「ああ明日は集会だ。何をしゃべっていいかわからない」なんて。普通の人なら、土曜日の晩になったら、「ああ明日は休みでいいな」と。私はそうではない。針のむしろ。「明日は集会がある。何をしゃべるの？」と(笑)。そういう時に、

「すべて労する者、重荷を負う者、われにきたれ、われ汝を休ません」

ああ、ありがとうございますと。

「あなたは何者でもない。あなたは私と一緒に歩いてきたではないか。そのままの生なまの姿をぶつけて皆さんに語って、皆さんと一緒に聖書の言葉をたどればいい。立派な説教なんかは要らない。キリストがいかに素晴らしいか、いかにキリストが自分たちを生き生きと生かそうとしていらっしゃるか、その現実をそのまま告白すればいい」

と。それもなかったら、「何もないから、皆さん、祈って、助けて」と、それでいい。立派であることは必要ない。よく小池先生が言ってくださいました、

「あるがままでいい。あるがままの自分を投げ出す、これが秘訣だ。いい格好しようと思うなよ」

と。そういう日々なんです。そうしますと、本当に何か湧き上がってくるものがあります。感謝、讃美、家族のことも、孫たちのことも。

孫たちは実は障害をもつて生まれてきました、二人とも。ずっと車椅子の生活です。20歳くらいまでしか生きられないと言われていた。一人はもう16歳になっています。その下の孫は6歳下で、まだあまり心配していないけれども。上の子はだんだん不自由になってきました。けれども、その子たちを毎夏、御殿場で――YMCA東山荘というキリスト教の施設がある――そこで夏の特別集会をやるので、その時に連れていく。ボランティアの人たちが手伝ってくださいます。そういう集いに行くことを本当に喜びにしています。今年の夏行って帰ってきたら、「来年の夏が楽しみだ」と言ってくれる。そういう子供たちを見ていますと、本当にこの子供たちに天国を味わせてやりたい。身体の不自由さという不自由からは解き放たれないけれども、それ以上の自由をこの子たちに上げたい。

キリストが私たちにくださる自由というのは、決して目に見える形で、我々をいろんな束縛から魔法の力で解き放って、魔法の技術で私たちを自由にするのではない。いろんなものが外から襲いかかってくる。いろんなものが私たちを縛しばる。内側からもいろんな責め苦がある。それを全部、

「無力だよ。そんなものが問題ではないよ。あれどもなきがごとし」

と。そういう世界をくださっている。それが秘訣なんです。「見える所は何も変わっていないじゃないか」と。しかし、私の生きている次元はそれを突き抜けてしまった。天の次元に引き上げられてしまった。そこは光が輝いている世界、そんな所に私は遊あそんでいる。それでいい。だから、もう地上のことに拘こだわることはない。そういうものをくださった。

これが、皆さん、秘訣です。私は今日、いろんなことをメモしてきました。それから、このプリントにも聖言みことばをたくさん書きました。それからレジュメにも書いてます。どうぞ、お帰りになつて、よくよく味わってください。私が皆さんに語りたいことを要約しています。突き詰めれば、本当にキリスト・イエスをそのようにいただく。キリストは私たちを生かしたくて、生かしたくて、喜ばせたくて、喜ばせたくてしょうがない。キリストほど私を喜ばそう、生かそうとなさっている方はいない。喜んでる姿を喜んでくださる、そういうお方はいらっしゃらない。

仏教徒の方は仏教徒のままで結構です。神道の方は神道のままで結構です。愛のある人間そのままの姿で、霊界の太陽なるキリストが皆を生かそうとなさっている。その前に皆が手をつないで讃美できれば、こんな素晴らしいことはないではありませんか。そういう本当の突き抜

けた福音、それを私は世界に発信したい。狭いキリスト教ではなくて、

「神が私たちのために備えたもうたことは、人いまだ思い浮かびもしなかったことと、目いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、

神の愛する者たちのために備えたもう」

と、パウロがコリント書で言ってくれている。それはこういうことではないのでしょうかと、私は叫びたい。こんな素人^{しろうと}が、神学校も行っていない、聖書の勉強も不十分な、一介の法律学徒にすぎない、そういう人間が、キリストによつてこうやって生まれ変わって生かされて、喜々として生きている。それが天の父の御意^{みこころ}である。こういうシンプルな、単純な、何も妨げのない、無限無量なるキリスト、これを世界に発信する。日本はもちろんです。そういう私は大いなる希望というか、願いをもつて、これから何年地上で生命^{いのち}をいただくかわからないけれども、教育の現場にあつて人々に語りかけていきたいと、そんな願いであります。どうも、皆さま、ご静聴ありがとうございます。

●祈り

それでは、お祈りをさせていただきます。ごく短く祈らせていただきます。

天の父なる神さま、我々の救い主でありたもうイエス・キリストさま。この会場に聖霊となつて充滿してくださる御霊の主さま、ありがとうございます。今日は、このようなお天気の中をあなたが一人びとりに語りかけて、この会場へとお導きくださいました。本当にありがとうございます。どうぞ、この僕を通して告白せしめられた、あなたの無限無量の愛の福音が、今日お聴きになった方々の心の中に根付き、そして血となり肉となり、やがてそこから泉となつて溢れいで、このせちがらい閉塞感に満ちた、相対界の世界の中に真清水^{まきみづ}となつて溢れいで、私たちの目を天に向けしめ、そしてベートーヴェンがあゝの「第九」で歌ってくれたように、「幾百万の人々よ、相いだけ、あの星のあなたは天の父ぞ住みたもう」と。そういうキリストがもたらしてくださった本当の愛の世界を人々が知り、互いに「兄弟よ」と言つて抱き合う日が参りますように。

そのために日々、祈りを積み、地道な歩みを歩ましめてくださいますように。私たち一人びとりがキリストから遣わされた書^{ふみ}となり、僕^{しもべ}となつて、あなたの御名^{みな}を証^{あかし}し、あなたのご愛をお伝えすることができまうように。また、いろんなご病氣をかかえたり、ご病氣の方をお世話したり、いろんなことで苦しみを担つていらつしやる方々の痛み、苦しみ、嘆きをあなたは深くご存知で、憐れんでいてくださることを信じております。どうぞ、ご自分で苦しまないで、すべての重荷を主イエス・キリストの上に持つてきてくださるように。そして、キリストが「一緒に苦しんであげよう、一緒に担つてあげよう」と言つていらつしやる聖言^{みことば}を本当に素直に受けとつて、主と一緒に歩んで行くことができますように。どうぞ、一人ひとりをおん導きくださいまうように。

この尽くしませぬ感謝と祈りと讃美を、兄弟姉妹の胸のうちにそれと共に、尊き主イエス・キリストの御名^{みな}によつて今、御前^{みまえ}にお献げいたします。アーメン。